

中等教育研究開発室年報 第33号（2020年3月31日発行）別冊電子版  
2019年度 授業実践事例

国語科 高等学校第Ⅱ学年

「花山天皇の出家」（『大鏡』）一語り手に着目して一

授業者 今井 真由美

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校



## 高等学校 国語科 学習指導案

指導者 今井 真由美

日時	令和元年 11 月 29 日 (金) 第 1 限 (9 : 30~10 : 20)
場所	第 4 研修室
学年・組	高等学校Ⅱ年 3 組 43 人 (男子 25 人, 女子 18 人)
単元	生徒の主体的な読みから物語構造を読み解く
教材	「雲林院の菩提講」「花山天皇の出家」(『大鏡』) 『高等学校 改訂版 古典B 古文編』(第一学習社)
目標	1. 物語を読んで問いを立て、調べたことを関連づけて問いを解決しようとする。 (関心・意欲・態度) 2. 本文の内容や表現の特色を理解して読み取り、物語構造について考察する。 (読む能力) 3. 古典文法に従って本文の内容を構成や展開に即して的確に捉える。(知識・理解)

### 指導計画 (全 10 時間)

- 第一次 『大鏡』「雲林院の菩提講」を読む。(3 時間)
- 第二次 『大鏡』「花山天皇の出家」を読み、問いを立てる。(3 時間)
- 第三次 生徒が立てた問いに基づいて、調べたことを関連づけながら問いを解決する。  
(個人→グループ→全体) (3 時間) (本時 2/3)
- 第四次 二つの教材を通じて、『大鏡』の物語構造について考える。(1 時間)

### 授業について

本校国語科は、「テキストの表現を言語事項や背景を踏まえて解釈し、既存の知識、実生活での体験、読書等の追体験と結びつけて考えている」、「自己の考えを言葉で表現し、他者と交流することで多様な視点を得て柔軟に考えようとしている」、「自己の学びを振り返り、次なる課題を見出し解決しようとする意欲を持つ」の 3 つを、育成をめざす学習者像としている。

しかしながら、生徒は古文を読むとき、文法を確認し内容を読解すると、特に疑問を持つことなく解釈の段階でとどまっておき、次なる課題を見出し解決するところまでは至っていない。現行の学習指導要領では、テキストの内容をとらえた上で、ものの見方・感じ方・考え方を豊かにしたり、内容や表現の特色をふまえて作品の価値について考察したりすることが指導事項として挙げられており、平成 30 年度告示の新学習指導要領、「古典探究」においてもこれらは引き継がれている。そこで、学習指導要領・古典Bの指導事項に基づいて、生徒たち自身がテキストから問いを見出し主体的にその解決を図ること、また、その解決を通じて、語られた内容だけでなく物語構造に着目しその意図を考えていくことは、本校国語科が育成を目指す学習者像につながるものと考えた。

本時で扱う「花山天皇の出家」は、冒頭部分に淡々と花山天皇の紹介がされている。この冒頭部分に着目しただけでも「なぜ年若くして出家したのか」「なぜ帝位に就いていたのは 2 年だけなのか」など多くの問いを考えることが可能である。他にも生徒から問いを出させ、こうした部分についても「なぜだろう」と生徒たち自身がテキストを読みとり、調べたことを関連づけながら読み解いていくことで、テキストやその書き手と対話しながら読みを深めるという主体的な読みが行われるはずである。また、本単元で扱う『大鏡』は、190 歳の太政大臣と 180 歳の夏山繁樹の二人が行き合い、同行した繁樹の妻と 30 歳ばかりの若侍が加わり問答座談形式によって昔話が進められ、別の人物(筆録者)がこれらの対話を観察し、記録していくという物語構造を取っている。語りの中に見られる「あさまし」「恐ろしさ」などの表現に着目して物語構造に気付かせ、どのような人物がどのように語っているのか、なぜそう語っているのかまで考えさせたい。

題目 『大鏡』は「花山天皇の出家」をどう語っているのか ―語り手に着目して―

本時の学習目標

1. 物語を読んで立てた問いに対して、調べたことを関連づけて解決しようとしている。
2. 本文の内容や表現の特色を理解して読み取り、物語構造について考察することができる。
3. 古典文法に従って本文の内容を構成や展開に即して的確に捉える。

本時の評価規準（観点／方法）

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・物語を読んで立てた問いに対して、調べたことを関連づけて解決しようとしている。 (観察・記述の点検)	・本文の内容や表現の特色を理解して読み取り、物語構造について考察している。 (観察・記述の確認)	・古典文法に従って本文の内容を構成や展開に即して的確に捉えている。 (観察・記述の確認)

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点・評価	評価の観点と方法
<p>〈導入〉 前時の振り返りをする。</p> <p>〈展開〉 1. グループで考察した問いの答えを共有する。</p> <p>2. 出てきた問いの答えについて検討し、整理する。</p> <p>〈まとめ〉 次時の予告を聞く。</p>	<p>・「花山天皇の出家」を読んで立てた問いを確認する。</p> <p>・前時にグループ内で話し合った問いの答えを発表する。</p> <p>・根拠を挙げさせながら問いの答えを検討していく。</p> <p>・テキストと調べたことや既有知識を絡めながら考えるよう促す。</p> <p>・「雲林院の菩提講」「花山天皇の出家」の二教材を通じて、『大鏡』の物語構造を考えることを伝える。</p>	<p>・古典文法に従って本文の内容を構成や展開に即して的確に捉えている。(発言・記述の確認)</p> <p>・物語を読んで立てた問いについて、調べたことを関連づけて解決しようとしている。(発言・記述の点検)</p> <p>・本文の内容や表現の特色を理解して読み取り、物語構造について考察している。(発言・記述の確認)</p>
備考		

## 大鏡

## 花山天皇の出家

次の帝、花山院の天皇と申しき。冷泉院の第一の皇子なり。御母、贈皇后宮懷子と申す。

永観二年八月二十八日、位につかせ給ふ、御年十七。寛和二年丙戌六月二十二日の夜、九八四年。九八六年。

あさましく候ひしことは、人にも知らせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道

はなやまでら  
現在の元慶寺のこと。

せさせ給へりしこそ、御年十九。世を保たせ給ふこと二年。そののち、二十二年おはしましき。

あはれなることは、下りおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひける

に、有明の月のいみじく明かかりければ、「顕証にこそありけれ。いかがすべからむ。」と  
けんしやう  
あらわではっきりしているさま。

仰せられけるを、「さりとして、とまらせ給ふべきやう侍らず。神璽・宝剣わたり給ひぬる

しんし  
三種の神器の中の勾玉と天叢雲剣。

には。」と、栗田殿のさわがし申し給ひけるは、まだ帝出でさせおはしまさざりける先に、  
あしだのり  
藤原道兼。

手づから取りて、春宮の御方にわたし奉り給ひてければ、帰り入らせ給はむことは、ある  
はるみやま  
のちの一条天皇。

まじくおぼして、しか申させ給ひけるとぞ。

さやけき影を、まばゆくおぼしめしつるほどに、月の顔にむら雲のかかりて、少し暗がり

ゆきければ、「わが出家は成就するなりけり。」と仰せられて、歩み出でさせ給ふほどに、

弘徽殿の女御の御文の、日ごろ破り残して御身も放たず御覧じけるをおぼしめし出でて、  
ひろきでん  
花山天皇の女御。藤原為光の娘。祇子。

「しばし。」とて、取りに入りおはしましけるほどぞかし、粟田殿の、「いかに、かくは  
おぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただ今過ぎば、おのづからさはりも出でまうで来  
なむ。」と、そら泣きし給ひけるは。

さて、土御門つらみかぜより東さまに率ひらて出だし参らせ給ふに、晴明が家の前を渡らせ給へれば、  
大内裏の東側の上東門のこと。  
安倍晴明。陰陽師、天文学博士として名高い。

みづからの声にて、手をおびたたしく、はたはたと打ちて、「帝おりさせ給ふと見ゆる天変  
ありつるが、すでになりけりと見ゆるかな。参りて奏せむ。車さうぞくに装束疾とうせよ。」と言ふ声

聞かせ給ひけむ、さりともあはれには思し召しけむかし。「かつがつ、式神しきがみ一人内裏に  
陰陽師の使役する鬼神。

参れ。」と申しければ、目には見えぬものの、戸を押し開けて、御後ろをや見参らせけむ、  
「ただ今、これより過ぎさせおはしますめり。」と答いへけりとかや。その家、土御門町口  
なれば、御道なりけり。

花山寺におはしまし着きて、御髪みくし下ろさせ給ひてのちにぞ、粟田殿は、「まかり出でて、  
大臣にも、変はらぬ姿、いま一度見え、かくと案内申して、必ず参り侍らむ。」と申し給ひ  
道兼の父、藤原兼家をさす。

ければ、「我をば、はかるなりけり。」とてこそ、泣かせ給ひけれ。あはれに悲しきこと  
なりな。日ごろ、よく御弟子にて候はむと契りて、すかし申し給ひけむが恐ろしさよ。

資料2

【板書計画】

『大鏡』 花山天皇の出家

一 (次の帝より二十二年おはしましき。)

冷泉院

花山天皇

伊尹 — 懐子

984 位につかせ給ふ (十七歳)

在位  
世を保たせ給ふこと二年

986 御出家入道せさせ給へりし (十九歳)

- ・人にも知らせさせ給はで
- ・みそかに

そのうち、二十二年おはしましき  
〔存命だった〕

1008 没 (四十一歳)

【板書計画】

『大鏡』 花山天皇の出家

二 (あはれなることはくそら泣きし給ひけるは)

花山天皇 消極的 (ためらい)

1 有明の月いみじく明かかりければ  
「いかがすべからむ」

月の顔にむら雲のかかりて  
「わが出家は成就するなりけり」

2 弘徽殿の女御の御文  
「しばし」取りに入りおはしましける

出家

1 とまらせ給ふべきやう侍らず  
… 神璽・宝剣わたり給ひぬるには

手づから取りて、春宮の御方に  
わたし奉り給ひてければ

2 ただ今過ぎば、おのづからさはりも  
出でまうで来なむ  
… そら泣きし給ひける

栗田殿 積極的 (急がせる)

【板書計画】

『大鏡』 花山天皇の出家

四 (花山寺に恐ろしさよ)

花山寺

剃髪して出家する  
御髪下ろさせ給ひて

花山天皇 だましたのだな  
「我をば、はかるなりけり。」  
泣かせ給ひけれ。

栗田殿 兼家 出家前の姿  
「まかり出でて、大臣にも、変はらぬ姿、  
いま一度見え、かくと案内申して、  
必ず参り侍らむ」

日ごろ、よく御弟子にて候はむと契る

すかし申し給ひけむ

恐ろしさよ

【板書計画】

『大鏡』 花山天皇の出家

三 (さて、土御門へ御道なりけり)

京都市山科  
花山寺

土御門大路

晴明 (晴明宅)

「帝おりさせ給ふと見ゆる  
天変ありつるが、すでに  
なりにけりと見ゆる」  
「内裏に参れ。」

式神  
「ただ今、これより過ぎ  
させおはしますめり。」

御後ろをや見参らせけむ

花山天皇

上東門

花山天皇が出家したことを報告し、自分も出家する

## 『大鏡』 雲林院の菩提講

□II-3のみんなから出た問い

## 【構成・構造・語りに関わるもの】

- ・場所のセッティングについて(何故ここを語りの場ににしたのか)
- ・雲林院の菩提講になぜ一八〇、九〇の老人たちがあつまったのか。
- ・百九十歳くらいの人と三十歳の侍が同じ場にいるのはなぜか。
- ・「大宅の世継」という人物は架空の人名とあるが、なぜ仮名(??)を用いているのか?
- ・どうして世継という人をつくり語らせようとしているのか ・「架空の人名」とは?
- ・語り手の過去をはっきりさせる理由(個人名を用いている)
- ・大鏡の語り手を複数人ではなく、メインに超高齢の翁を作ったのは何故か。
- ・月並みですが、なぜ一八〇歳とか一九〇歳とか人間としてはありえないような長寿なのか
- ・一八〇歳は本当か ・百八十歳と違って本当? ・年齢が非現実的ではないか。
- ・年齢の設定(一八〇、一九〇)がおかしいのでは? ・老人たちは実在するのか。
- ・世継と繁樹の年齢を百七十歳前後に設定したのはなぜか(もっと歳を重ねていてもよかったのではないか)

- ・なぜ百八十歳も生きているのか ・長生きしすぎじゃないか ・何歳差だろう。
- ・なぜ一九〇歳や一八〇歳まで生きているのか。そういうファンタジーなのか。
- ・世継は一九〇歳、繁樹は一八〇歳とあるが、二人は何者なのか?
- ・「例の人よりはよなう」人たちはなぜそんな年寄りになるまで生まれるのか。
- ・男2女1の構図はいかがなものか ・なぜ翁二人、姫たちのことを書くことと思ったのか
- ・二人の老人はストーリーを展開する上での道具にすぎないのか
- ・世継は物語中でどういう存在なのか
- ・歴史を語るうえで、世継自身が体験した時代のことを語る形式にしている意味。
- ・細かい時代設定が分からないです
- ・このような設定にも関わらずツッコミ不在だが、この物語はどのような世界観の下成立しているのか?

## 【題名『大鏡』に関わるもの】

- ・どうして「大鏡」という題名なのか。 ・なぜ「大鏡」という題名がついているのか?
- ・題名の「大鏡」はどのような意味なのか。本文と関係があるのか。
- ・なぜ鏡物は歴史書の最高峰とされているのか ・鏡の要素はどこに出たのか

## 【内容・伝えたいことに関わるもの】

- ・世継はこれからどんな話をするのだろうか。 ・おじいさんふたりの何をほはなしているのか。
- ・全体としてのメッセージは何か ・筆者は読者に何を伝えたくてこの話を書き残したのか。
- ・おきなとおうなの会話の内容を端的にしてほしい。どんな内容?
- ・リアリティのない文章で伝えたいことはなんなのか ・筆者は結局何が言いたいのか
- ・状況わからん ・どういう状況? ・何が言いたいか
- ・一番最後の世継のセリフは何を伝えたかったのか
- ・P66L7 いとあさましうなりぬ とはどういうことか
- ・P66L7はなんでいとあさましいのか? ・いとあさましうなりぬ?
- ・いとあさましうなりぬ」とは誰のどういう気持ちか。
- ・侍以外の人々も老人たちに興味を持ったのか。 ・筆者はなぜ、年寄りに興味を示したのか。
- ・どうして侍は世継と繁樹に興味を持ったのか。
- ・どうして世継も繁樹も菩提講に参加しているのか。
- ・世継達はどれくらいの時間をかけて大鏡を話し終えたのか。
- ・「おほしきこと言はぬは」とあるが、それはどうしてか。
- ・文章中に登場人物は何人でのどのような関係か。
- ・菩提講(仏教)と黄泉(神道)のとりあわせはいいのか。
- ・名前の前に歳を聞くのはなかなか不自然ではないのか。
- ・なぜ「今ぞ心やすく黄泉路もまかるべき」なのか。
- ・なぜ安心して冥途への道に行くことができるのか。
- ・太政大臣はなぜ繁樹という名前を与えたのか。(「夏山」とのつながり)
- ・なぜ筆者は翁を「うたてげなる(薄気味悪い)」と表現しているのか。
- ・どうして翁たちはこんなにも複雑な自己紹介をするのか。
- ・侍はどこからでてきたか
- ・当時は何歳までが童だったか?
- ・入道殿下はどのような経緯で出家したのか。
- ・なんで古文は会話文のみの文がないのか。「〜」と「い、い」と続いている。
- ・なぜ会話文が多いのか
- ・雲林院の菩提講に詣でた時に他に人はいなかったのか。
- ・なぜ大丸は二〇?歳も年もはなれて年寄りいた大宅世継のことがわかったのか。
- ・繁樹が世継のことを知っていたのはなぜか
- ・なぜ「きむぢが姓は何ぞ」ときいたのか ・なぜ名前がそこまで重要なのか
- ・対面する昔の人はどのくらいの年? ・P64L8の「昔の人」とは誰のことを指すか。
- ・何で穴をほって言ったのか、なぜ穴?
- ・なぜ昔の人はものを言いたくなくなったら穴を掘ったのか?

## 『大鏡』 雲林院の菩提講

□グループで決めた、考えたい問い

## 【構成・構造・語りに関わるもの】

・二人の男は文章でどういう役割を果たしたか。

・なぜ「大宅の世継」という架空の人名を用いているのか。

・「むいづいづ」と始まり、語り手の感情もまじえながら「見たままの光景」がつづられて話が進んでいくが、ともすれば随筆に近いように感じる。「このような語りを歴史書に取り入れた真意と効果とはなにか。

・筆者がこのような構造(世継・繁樹が内容を語り、それを「私」が見ている)をとったのはなぜか。「この構造」する効果、私の役割とは何か。

・ただ昔の時代を生きた人々の生きざまを書きつらねるのではなく、世継と繁樹というそれぞれに人格をもつ存在に語らせたのはどのような意図があるのか？

## 【題名『大鏡』に関わるもの】

・なぜ「大鏡」という名前なのか。

## 【内容・伝えたいことに関わるもの】

・なぜ道長のすばらしいことを語りたいのか。(藤原氏のプロパガンダ説)

## 【その他】

・世継と繁樹は、今はどのような身分なのか。(何をして暮らしているのか)

・一八〇年、一九〇年も生きていてなぜ菩提講という場に来る必要があるのか。

□再度考えた問い(グループで選ばれなかったもの)

・歴史の叙述なら地で記せばよいものを、なぜ架空の人物に語らせようとするのか。

・なぜわざわざ翁に語らせたのか、第三人称でよいのではないか

・内容を登場人物の語りに行き、第三人物の語りに行くとどんな効果があるのか

・架空の人物を用いるということはどれほど読者に伝えなければならぬ重要なメッセージがあるのか

・一八〇歳や一九〇歳という現実的に考えてありえない設定にしたのはなぜか。

・世継と繁樹を一九〇、一八〇歳としたのは文中でどのような効果をねらったものなのか。

・今の入道殿下について語るのに、一八〇、一九〇歳ほどの高齢である必要があるのか。

・なぜ筆者はありえないような歳をした人物を物語として書いたのか。

・何故こんな現実では有り得ないような老人を出したのか

・結局一八〇、一九〇歳というのは本当なのか、嘘だとしたら、なぜそうしたのか。

・老人たちは実在するのか、架空の設定なのか？架空ならば、その理由は？

・年齢設定に深い意味があるのか。・なぜこの年齢設定にしたのか。

・一八〇と一九〇という数字に意味があるのか。単に年の差があって、非常に高齢であるというのになにが違うのか。

・何故こんなに長生きしているのか。・おじいさんたちはなぜこんなに元気なのか

・姫を登場させたことの意味は何か。・姫の存在意義は何なのか。

・侍はなぜ翁二人の会話に興味を持ったのか

・世継や繁樹が、入道殿下を褒める理由。・なんで入道殿下について話しているのか？

・入道殿下のお話をするだけで世の中全てが明らかになるとあるが、それはどのような関わりでしてゐるのか？

・幼いころの面影がよっぽど残っていたのか

・なんでわざわざ叙述目的を再提示したのか。

・若侍だけが「うたてげなる」人たちの異様に気づいているのか。

・なぜ語り手は二人の会話を「いとあやまじき」と言ったの「、みづしき者たちは、見おしせ、居寄りなどしたのか

・なぜ語り手は世継、繁樹、姫、若侍が語っている内容を一歩ひいて見ていたのか。

・最後の世継の会話文の意味と、本文に書かれている意義

・極楽浄土に行く事を三〇代から考え始めるものだろうか

・大丸と繁樹という名前の関係は？

・「大鏡」はどのような意味か。

・大鏡とその他の鏡との関連性がしりたいです。

・なぜ鏡物シリーズは歴史書の最高峰とされているのか。

・なぜ鏡物シリーズは歴史書の最高峰とされているのか。

## 『大鏡』花山天皇の出家

□グループで決めた、考えたい問い

## 【構成・構造・語りに関わるもの】

- ・ 清明と式神の場面はこの話の上でどのような役割があるのか
- ・ 何故本文には清明の下りがあるのか。
- ・ 物語の中で清明が果たす役割(記述することの効果とは)
- ・ 世継は藤原家の、花山天皇に対してどういった感情を抱いているのか
- ・ 架空の人物に語らせることによる効果は何か

## 【内容・伝えたいことに関わるもの】

- ・ なぜ粟田殿は、そこまでして、花山天皇を退位させたかったのか?
- ・ 粟田殿(道兼)が花山天皇の退位を急がせたのはなぜか。
- ・ 花山天皇が退位・出家した理由
- ・ 花山天皇はなぜ出家したのか(自発的理由、道兼の働きかけ等)

## 【表現に関わるもの】

- ・ 月の描写が暗示するものは?

□個人で考えた問い(グループで選ばれなかったもの)

- ・ どこ視点で書かれているのか
- ・ 語り手の立場
- ・ この文章を読む限りでは、地で語らず世継に語らせる効果がわからない。
- ・ なぜ世継はこの話をしたのか
- ・ 粟田殿が花山天皇をだましてしていることが、聞き手(読者)には分かりやすく描写されているのはなぜか
- ・ なぜ陰謀が詳しく知られているのか
- ・ 道長の話にどう繋がるのか。
- ・ 雲林院の菩提講と花山天皇の出家に話の関連性がみえない。

・ 粟田殿はなぜそこまでして天皇を退位させたかったのか、あるいは皇太子を即位させたかったのか。

・ 粟田殿がここまでして春宮に天皇の座につかせようとしたのはなぜか

・ なぜ粟田殿はさわがし申したのか。 ・ なぜ粟田殿は花山天皇をだましたのか

・ なぜそら泣きしたのか

・ 粟田殿はどのように花山天皇をだまして説得したのか(出家を決意させた経緯)

・ 粟田殿の策略を止める人はいなかったのか

・ 花山天皇に対して行った陰謀が大鏡に記される程陰謀が有名になったのならば、陰謀を行った粟田殿は非難されなかったのか

・ 一条天皇の即位による藤原氏の権力強化が目的だとして、粟田殿の独断行動なのか一家の計画的行動なのか。

・ 粟田殿が、花山天皇の出家をせかしたにも関わらず自身は一度父に会いに戻ったのは何故か。何かはかっていたのか。

・ 粟田殿になぜ花山天皇を翻弄する力があるのか

・ 道兼は結局出家したのか。

・ 花山天皇の出家は本人の意志なのか

・ 花山天皇は出家するまで粟田殿が裏切ったこととどうして気づけなかったのか。

・ 花山院はなぜあのタイミングで気づいたのか ・ なぜだまされたと思ったのか

・ 花山院の願いは出家することだったのか、それとも粟田殿と友に出家することだったのか、それとも世逃げすることだったのか

・ 花山天皇が花山寺へ出家したのは何か意味があるのか。

・ なんて、清明の声に対して天皇は感慨無量だと思われたのか?

・ 清明が天皇が退位しそうな空の様子とはどんなものか

・ 清明は花山院が退位したことを察知した上で、何を天皇に申しあげようとしていたのか

・ 清明の式神の姿は何だったのか(猫とか?)

・ 天皇、貴族にとって、出家することは良い事なのか

・ 出家したら天皇にもどれないのか

・ 陰陽は楽しいのか

・ 作中に鬼神が現れるが、この作品の実話と脚色の境はどのくらいなのか

・ 清明は車を準備させて、結局何がしたかったのか

・ 「出家」の表現の使い分けにどういったような効果を得ているか

・ なぜ雲がかかっている時は迷うのに雲がかかると前向きになったのか

・ この後の粟田殿と花山天皇の関係はどうなるのか

・ この文の教訓とは?

大鏡「花山天皇の出家」

語り手（世継）

批判 あはれなること

- 栗田殿
- ・さはがす
- ・（神璽・宝剣）手づから取りて
- ・そら泣き

花山天皇

B

清明

人間世界の異変 天の異変

帝退位の天変

「天変ありつるが  
すでになりに  
けりと見ゆる」

聞かせ給ひけむ

花山天皇  
自分で決めた  
退位とはいっても

「これより過ぎさせ  
おはしますめり」

感慨無量  
後戻り×  
退位は運命だった

悲劇性を強調

C

花山天皇

「我をばはかるなりけり」

すかし申し給ひけむ…恐ろしさよ

栗田殿

批判

物語 - 世界全体を語るもの

資料7

慶応義塾大学 文学部

7-① 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー（ ）

□グループで考えた問い  
世継は藤原家に対してどのような感情を抱いているのか  
花山天皇

□グループで出した答え

藤原家 蔑視

花山天皇 同情

〈理由〉

本文中では栗田殿の  
行動に対し  
「そら泣き」想うし  
と表現する存在  
明らかで軽蔑した  
表現をしている  
大鏡本文でも  
道長以外には  
こぼれどころはない  
表現があり、その  
なごみがある。

（糸衣身の変身は  
エピソードもよく淡々と  
つづらけている一方で  
花山天皇の尊は長く  
書かれ眉入外のように  
ものも感じられる。  
そしてこぼれどころ  
感情は、騙された天皇に  
対する明らかで同情がある。11

慶応義塾大学 文学部

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー（ ）

□グループで考えた問い  
架空。人物に語るべきことによる効果は何か

□グループで出した答え

架空の大鏡に語り手というよりは語り手によって、道長と  
大鏡をクッキリ分けられた。

この物語は藤原道長を批判している。彼の行動は仏の  
道理に反しており、本文中でも「あまのこし、かほれに悲しきし  
「恐ろしさよ」本文中の出来事に対し、感情を述べている。

また、世継が語っている林記というのは、雲梯院で講師をやる間、  
世継、藤原の村説を所くの人（講師をやる人）が聴いている林記。  
二つは林記、世継、藤原の年齢は、「仏の説法」という  
場をクッキリあげている。二十の年齢は、彼らを果敢と存在を  
しめ、仏の力にしている。その彼りが語り、この二つにより  
当時の権力者を批判するという行為を可能にしている。

7-② 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー)

□グループで考えたい問い

何故本文には晴明の下りがあるのか。

□グループで出した答え

栗田殿 天皇が出家を思い直すと、計画がくらくたため、天皇が他人と接触するのを阻止してまた。

花山天皇

栗田殿のモクろカに気付かず、素直に従う。

伏線・別の視点

晴明の話を聞く

↓花山天皇の心理は操らされた(？) ① 下りにもおぼろげに思いつくけれど、

しかし、もう後戻りできない。

↓栗田殿が逃げたときにけじめがつけられたと知り、

真相が明らかになったときの劇的效果を高めていくのでは？

別の視点を入れることで...

花山天皇の認識と實際の状況の差が浮き彫りになる ↓伏線

7-④ 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー)

□グループで考えたい問い

物語の中で晴明が果たす役割

( 記述することの効果とは )

□グループで出した答え

↓晴明、記述はなかった場合

、終始花山天皇がたまさか行く様子だけで構成される。

↓、ある場合

「さりともおぼろげには」に注目

自分で考えたこと、それに退位がまた、名高い陰陽師である晴明は、退位することをおぼろげに知っていたこと、感慨無量にはなした。つまり、退位の運命として承知していたことを感じた。

↓最後に栗田殿にびすびすと退位をせよと頼まれたことに気づく。

ヤロリ、退位は運命だ、と、感じ、そこを花山天皇は悲しさを隠してやる。

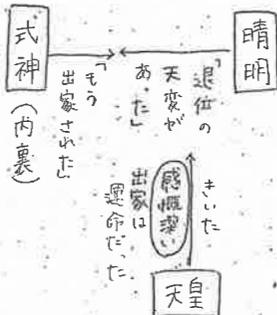
7-③ 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー)

□グループで考えたい問い

晴明と式神の場面はこの話の上でどのような役割があるのか。

□グループで出した答え



晴明

退位の運命

天変

あはれ

出家

運命

天皇

感慨

式神(内裏)

。本文の「だが今過きは、おのづから下りも出てまうて来なむ。」

↓栗田殿の陰謀の深さを示す。

。天皇、女御の女を取りに行く

。栗田、うそ話で息を切る

。晴明、お参りしようとするが間に合わなかった。

↓天皇の出家は晴明にと、タイムリクが悪かった。

↓一旦踏みとどまることは大事

。本文の

あはれ

↓帝の決意は固めた

。式神無能だった

晴明がいろいろ間に合った？

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー)

□グループで考えたい問い

月の描写が暗示するものは？

□グループで出した答え

有明の月の役割

↓空に雲中を脱出すると、花山天皇が明るすぎると言っている。ちゆうちゆう。

↓このちゆうちゆうは出家のちゆうちゆうである。

↓そこで栗田殿はあわてて、神器のことなど持ち出して花山天皇のちゆうちゆうを断ち切る。

↓そもそも何故出家しようとしたのか？

↓弘徽殿の女御のおぼろげのため。

↓栗田殿は何故せかしたのか？

↓血縁関係のある一条天皇を花山天皇が出家したいということに便乗してたてた。政治の実権を藤原氏が握っていたから。

(歴史的背景) 関白の藤原氏と政治的実権を握る花山天皇が

↓月の顔にむら雲のかかりては出家が成就することの兆い。

対立。

↓当時、月は悟りの象徴であった。

月には内面をてらし出す。煩惱をあらわにする。

月が←かみりと

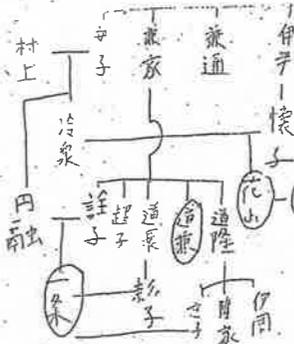
。家がなくなる出家成就

### 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー

□グループで考えたい問い  
花山天皇が退位・出家した理由

□グループで出した答え



オマケとして 栗田殿は花山院の出家をせがみした

栗田殿は花山院に出家せよと要求した

花山院自身は出家をのりこめた

出家は周囲には大がやうに行われた

参考資料

花山院の即位の一年後に惟子が死去、その一年後に出家

伊予の家の首領は出家を強よしていた

出家後、僧は失脚した

→

惟子は死んだら、次子に引き継いで出家して僧の修行をしたという

その次子に引き継いで出家したという、退位+出家した

また、花山天皇の出家は、藤原氏の利益のため

### 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー

□グループで考えたい問い

栗田殿が花山天皇の退位を急がせたのはなぜか (道兼)

□グループで出した答え

藤原兼家(道兼の父)は花山天皇が即位についた44年の時点で既に56歳であり、寿命短くも考え、やめるだけ早く出世できるように、道兼の協力を得ながら花山天皇の退位を急がせたと考えられる。

花山天皇の退位を急がせたのは、父の死後、天皇は若くより病弱で精神不安定な状態になり、頼りなくなった。

弘徽殿の御子の死、姉尊子内親王や伊予三女の死、円融院の出家やその他多くの知人の出家、山出家ブーム

関白も右大臣も公家も花山天皇を支持しなかつた

(兼家)

↓孤立無援

伊予三男を中心とした山内白河新政府が改革し、反動貴族に政権を奪われた

前内親王も自分の子懐仁親王推し(兼家の子)

兼家は長兄伊予の死後、六年百次兄と争い、敬遠する内親王に娘を嫁し、菅原の探の親王を誕生させた。

→ ストライキで内親王を退位させたほど急だった。

### 『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー

□グループで考えたい問い  
なぜ栗田殿は急がせて花山天皇を退位させたのか?

□グループで出した答え

栗田殿は父・兼家の根拠を頼りて、伊予から、

花山天皇の退位した。兼家の娘の嫁が天皇に嫁した。↓政務の座を

母兄兼通に回す準備をしていた

→

女性兼通殿に頼んだから

→ 栗田殿は兼家と天皇の御少の役割をこなして

(兼家) 花山天皇の即位で関白になる人が退位に同意し、その

→ 兼家の御少の役割をこなして

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー ( )

□グループで考えたい問い

花山天皇が退位した理由

□その問いに決めたのはなぜ?

「我とは、はふるなりけり」に興味を持っていた。

□その問いにどうアプローチできそう?

栗田殿の発言から、彼の意図と読み取る。  
花山天皇の "

□答えまたは答えを導くためのメモ

出家して娘の保表とした

「娘は死んでしまふから沈んでいさ時、道兼にこの女を退位+出家した。花山天皇の後の一条天皇のおか。藤原氏的に利が大きいので、花山天皇がたました。(道兼と花山は他人の様なのだ)

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー ( )

□グループで考えたい問い

なぜ、栗田殿の、その時で、花山天皇を退位させたのか?

□その問いに決めたのはなぜ?

・そもも論が、記されていなければ。  
・まじな。だから。  
・おちおち、経路で退位させようとしているのには意図がわかるから、

□その問いにどうアプローチできそう?

・栗田殿と、花山天皇 について調べる  
・その時の花山天皇の状況について調べる。

□答えまたは答えを導くためのメモ

栗田殿の父は「兼家」で、花山天皇が退位したら、  
「娘の子供が天皇になれる。」  
→ 政権の座を握られる。  
自分の権威を握る。  
... 兄、兼通と関白を争っていた  
花山天皇は、要としてこの時期 → 今がチャンス

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー ( )

□グループで考えたい問い

清明と式神の場面はこの話の上でどのような役割があるのか。

□その問いに決めたのはなぜ?

この話自体に直接関係があるように思えないが、なぜ挿入されているのか疑問に思ったから。

□その問いにどうアプローチできそう?

安倍清明について調べる

□答えまたは答えを導くためのメモ

・安倍清明と花山天皇は親交があった。  
・清明「参りて奏せむ。車に装束敷うせよ。」→帝にも聞かされた。  
⇒退位を止めようとしたが間に合わなかった。  
⇒帝「あはれ、帝の決意は変えられなかった」

(花山天皇は悪政としていて、清明はこのまま良い政治に任せたらと止めなかった。)

『大鏡』 花山天皇の出家

メンバー ( )

□グループで考えたい問い

月の描写が暗示するものは何か?

□その問いに決めたのはなぜ?

月の描写について考えることで、文章全体の構成をとらえやすいと思ったから。

□その問いにどうアプローチできそう?

有明の月の象徴とは? → 花山天皇が出家について(めらう) → 何故、(めらう)のか? 栗田殿にせかして出家を決意させたのか? → 栗田殿の陰謀とは? → 月の顔にむら雲のかかり、少し暗が、  
IP王のせい

□答えまたは答えを導くためのメモ

1. 有明の月 → 明るすぎる。花山天皇が(めらう)、出家のため。  
2. 栗田殿が神器の話をして謀略で出家させた → 理由は御殿の女御のせい? → 謀略のやり方 → 出家は成就する → 出家成功の兆しをみせる。  
4. 出家成功 → 一条天皇をたてられる!!

## 2019 研究大会授業

『大鏡』は「花山天皇の出家」をどう語っているのか一語り手に着目してー

### 実践上の留意点

#### 1 授業説明

『大鏡』は大宅世継と夏山繁樹という超高齢の翁二人と姫、若侍の問答座談形式で昔話が進められている。この物語構造に着目すると、語られている物語の内容だけにとどまらず、この物語構造の意図、作者の持つ歴史観や批判精神といった点にまで広げて作品を捉えることができるのではないかと考えた。

本単元では、まず、「雲林院の菩提講」で問いづくりを行った。初読の後に出てきた問いは資料3の通りである。問いをふまえて読解を行い、再度問いづくりを行ったものが資料4である。読解後になると、語りの構造の意図や語り手に関する問いが多く見られた。そこで、より深い問いを立て、問いを精選するために、「花山天皇の出家」では読解を行った後で問いづくりを行った。資料2の板書計画のように、「誰がどうした」という人物と出来事を中心に読解した後、まず個人で問いづくりをし、その後話し合いを経て考えたい問いを1つに絞った（グループで選ばれた問いと、個人が作った問いの一覧は資料5）。そして、問いを解決する過程でのグループワークでは、解決に結びつく道筋を考え、話し合いながら答えを導き出させた。工夫点として、その問いにどのようにアプローチするかを考えさせて、解決へと向かうような学習プリント（資料8）を用いた。この方法を採用することで、問いとその答えだけでなく、解決に向けた道筋が適切であったかをリフレクションすることができ、自立的な学習者を目指すことができるのではないかと考える。

本時では、生徒達の立てた「清明と式神の場面はこの話の上でどのような役割があるのか」という問いに対する3つのグループからの答え（資料7-②・③・④）を基にして問いの解決を図るとともに、「世継は藤原家または花山天皇に対してどういう感情を抱いているのか」という問い（資料7-①）をつなぎ合わせることで、作品世界により深く迫り、語り手が語ろうとしたこと、また、このような物語構造をとる意図に迫りたいと考え、授業を行った。

#### 2 協議会より

生徒から出た「問い」を学習の中心に据えて構想した授業に関連して、問いの解決を図った後に、また新たな問いが出てきた場合の解決方法、生徒が気づけていない問いの導き方、問いの質の意識化などの問題点が挙げられた。問いの質の意識化については、テストの設問を作らせ、配点まで考えさせると質の高低を意識させることができるといった意見が出た。また、古文（古典）で問いを立てるのは難しいのではないかと意見もあったが、本実践の生徒の様子からも予習のさせ方の工夫や、現代語訳の利用などで十分可能であると考えた。助言者からの「問いは主体的な学習の手立てである」という言葉からも、古典での問いづくりの必要性を感じた。

